



幕末の江戸職人



関東大震災で在住外国人の救出にあたる建設業者

明治前期、東京・芝の鳶と芸者



食事をすする。都合一日四食である。その食後の休憩中に賭場を開く、夕食後復た始めると云った調子であった。

信州は其頃侠客の多い所で各々繩張りを定め群雄割拠の状態で、時々請負者側の親方達と衝突し果し合いを始める様なことは珍しくなかった。土方はこう云う喧嘩で二、三人の人殺しをしても親分から五円札の一枚も買つて草鞋をはき、足尾銅山にでも逃げ込めば先ず判らずに事済みとなるのである。

当時の土方は江戸っ子と同じく、宵越しの金は遣らなると云う連中ばかりで、金を受取れば直に飲んだり喰ったり、或は賭博に耽つて忽ち囊底を払つて了うのが普通であった。金を使わず貯蓄して置こうと云う様な者はシミツタレた奴だと指弾され、人間の出来損いの様に取扱はれ、仲間づき合いもされなかつたのである。

しかし感心なことには、当時の土方は親方に対しては絶対服従であった。時には親方が随分苛酷な無理な叱り方をしたり、度を過ぎた手荒い見せしめをすることが有つても、別に親方を怨む様な様子もなかつたのである。

土方が少し骨借しみでもしていようものなら、親方は忽ち眼を怨らし雷を落して、「一体キサマは何のために鉢巻しているのだ。鉢巻と云うものは汗が目に入らぬ為にするものだ。もっと汗みどろに働いて、鉢巻に恥をか

パン玉を六尺に切つて買うものとは違い、三尺帯一本あてに染めたもので、両端にソロバン玉のない無地のところのあるものが粋であつたのだ。色はあかね色が若い者、茶や紺色は年輩の者という習慣であつた。

仕事師（鳶）の足拵え。仕事師は紺足袋に草履ばき、草履は古布などを使わない藁ばかりに限られた。これは足場の上ですべらぬためである。当時はまだはだし足袋などは一般に使用されなかつた。

仕事師が足場がかりに豆絞りの手拭の鉢巻、腰にすっぽんの尻尾のように切り繩をまいて、丸太をたぐる威勢のいい姿もいまは昔語りである。」（竹田米吉「職人―一建築職人の回想―」より）

「親方（土方）の身なりは例の日縮緬の帯をしめ、太い金鎖をまき、当時まだあまりはやらぬ羽二重の腹掛、股引という豪華な姿であつたのに対して、下で働く土方は実に惨めなもので、朝は半纏一枚で震えながら部屋を出て、仕事場へくるありさま。もちろん当時の土工の習慣どおり、仕事に取り掛れば、寒中でもほとんど裸に等しい半纏一枚で仕事をする。まるで親方は大名、下方は乞食だとの譬えどおりであつた。」（竹田米吉「職人」）

かすな」などと云つて叱り飛ばしたものである。その頃土方は大低朝の二、三時頃から起床して仕度を整え、未だ暗いのに、星影を踏んで現場に出かけたものである。」（「鉄道請負業史」）

△当時の職人の服装▽

「当時一般職人の服装は、いうまでもなく腹掛、股引、半纏であつたが、現在とは大変ちがっていた。

まだシャツも現在のパンツもなかつたので、肌着一般に木綿の肌褌絆、猿又類似の半股引は特殊の人の使用するもので、職人などはみな六尺褌、あとは腹掛に股引、それに上衣は半纏、寒い時は半纏の重ね着だけ、股引も寒中でも紺の盲編で浅黄の裏つきのもの一着、はなはだ簡単であるが、そのかわり腹掛も股引も各自寸法を取らせて、足袋屋へ特別に注文する。股引などは少し洒落た男は、足の先へ紙をはさんですべりをつけて足を通さねばならぬほどピッタリ合つたものを使用する男が多かつた。草履の鼻緒が二石（二石）といつて二本になり、前つぼが茶色の物を、前を帆かけ舟のようにそらして、つつかけ草履で履くなどは、最もいなせなものといつた。帯はソロバン玉の三尺、これも洒落た男は白木屋の一本染め、つまり足袋屋などに出来合いで売っている一反統きのソロ

△実業家と奔走屋▽

「大工の棟梁が江戸城と大名屋敷との関係で神田に集つたように、関東の土工の親方の多くは、利根川の水防工事のために、その沿岸に発生したものらしい。だから当時は有名な土工の身内、たとえば前記の巨組の組長の親方、羽生重兵衛の羽生身内とか、三谷身内とか、梅原身内とかの名は、利根川沿岸の村や字の名を冠する身内が関東の土工には多かつた。土工の技倆のほうも、そうしたところの人たちが進歩していたようだ。締切りをやるとか、土の掘鑿、堤防づくり、土羽打ちなどがその本業だが、当時としては新技術のコンクリート打ち、土砂運搬などのトロ線の配り方や引き方なども、彼らの得意とするところであつた。鉄道土工もこうした人たちに源を発しているのではないだろうか。」

（参考までに、セメントは明治七年に初めて国産品ができていた。鉄骨造りは明治二十八年、鉄筋コンクリートは明治三十六年となつている）

「彼らは仕事を専門にする土工を、はなはだ滑稽ではあるが実業家と称していた。それに対し奔走屋と称して一食一飯をあてに歩いたり、工事場へ奉願帳なる怪しげな帳面を持ち回り、土工以外の親方や請負師の事務所ま

で金買いを強請して歩く無頼漢のような土工や、その顔役の顔役になつたり、博徒と土工とを兼業でやる土工の親方はまだいなくなつたようである。彼らはいかに有名でも、どこまでも工事場中心であつた。

働く土工はまったく専門的で、今日の人夫とは全然趣を異にしていた。すなわち土工の仕事はただの人夫にはできなかったのだ。たまたま専門の土工の間に人夫が混じると、これを开当持ちと称して土工は軽蔑していた。

(注・奉願帳は、傷をして働けなくなった労働者が、当時は労災保険や失業保険などがないので親方の紹介状をもって全国の飯場を回り、食や金を得て生活していく習慣だつたようだ。それをヤクザが悪用して、金をフンダクツテ歩いたらしい)

この巨組の土工の親方は川俣の繁さんといつたが、直接仕事をしているのは、その子分の重さんという人だつた。この繁さんは珍しく好々爺だが、怒ると凄かつた。重さんの子分、繁さんにとっては孫分に当る敏公というきかない男がいて、仕事場の棒頭、すなわち世話役格だつたが、その男が仕事の上で親分の重さんに食つてかかつたときは、川俣の大親分の繁さん、怒るまいことか、「この野郎、土方の仁義を知らねえ野郎だ」とばかり、小棒を持つてのばしてしまつた。人間思い切りどやされ

人の腰巻に似たもの、とはいつても腰巻の色気はなく模様も違つているものをまとう。

「土方殺すにや刃物は要らぬ。雨の十日も降ればよい」と歌の文句にあるとおり、全くの着たきり雀。雨が降れば室内の仕事でも必ず休業。夜は各自十五銭を持ち寄つてたいがい賭博、勝つた者は女郎買ひ、仕事が嫌になつて怠けたくなつたり、喧嘩をしたり、他の職人を嚇すような悪いことをして、いたたまれなくなれば「飛びっちょ」と称して、他の仕事場へ無断転身。いわゆる一宿一飯は彼らの付合ひ、どここの親方へ行こうと土方の仕事場なら、例の「お控えなさい」という挨拶で、自分の稼業の略歴を口述しただけで、必ずなんとかなるといふのが、彼らの日常である。」(竹田米吉「職人」)

△小回り▽

「ところで彼らの仕事ぶりたるや、今日から見るとならば実に素晴らしいもので、土をしょつても、砂利を運んでも、とうてい今日の土方のよくなる所ではない。掘つた穴から土を出すのに、いまではリヤカー、もしくは猫車で引き上げるが、昔は土方もっこ(これは大三尺といて三尺二寸角)、現在一般に使用するもっこは、昔は植木屋もっこといつて、植木屋のような柔な土いじり

ると本当にのびる事を私は初めて実見した。こののびされた男は、土方らしくなく理屈が多く、腰巻、素半纏のその当時の土方の風体の中にあつて珍しくも盲編の腹掛、股引といういでたちで、身なりだけは他の土方と全然違つていた。しかし、他の職人を盛んに嚇す。請負師の番頭を困らせ、人殺しにちかいかつことをやる。これが真面目な繁親分の目に余つていたのであらう。それでこのきつかけが感しめを受けたのだ。その男もそれなり飛びっちょで仕事場へ姿を見せなかつた。」(竹田米吉「職人」)

△土方の四度飯▽

「当時の土工の生活状態についていえば、一人前の土方には必ず親方があつた。何々身内といつて、親方も子分も孫分も兄弟分も、営業上の系統は筋道が立つていた。だから土方はみな、いずれかの親分の部屋へ入る、食事は一日四度、土方の四度飯という奴。一日の労働は規則といつて一定賃銀だつた。私の童紡時代の明治四十年ごろはこの規則が一日十五銭だつた。親方の部屋は仕事を追つて転々とし、大工事なら、今日でいう飯場、その当時はただ部屋といつたバラックを仕事場付近に造つて通うのだが、小工事はだいたい仕事場付近の長屋を借りていた。衣類は半纏一枚、下は、一人前の土方になると婦

をする人夫が使用したもの。大三尺もっこに尻鞆か足で踏みつけて山盛りに土を入れ、これを後棒が肩を入れ、前棒が腰を切つて、幅の狭い歩み板を平気で登つたものである。こうしてもっこ一枚に棒一本——一枚一本、三人組でたいがいの深い根切りでも一人あたり一坪以上の土を出す。深さと土質により一日何ほどという小回りでやらせたもので、土方の常備仕事では恐らくなかつたであらう。(小回りとは、昔は土方の専用語で、一日に仕遂げる仕事の分量を指す)彼らの賃銀は規則で一定であるから、小回りは仕事の分量の指示のみですんだ。ただコンクリート打ちとか、そのほか特別に骨の折れる場合は酒手といつて別に五銭か十銭余分に買つた。今日では大工でも左官でも小回りという言葉を使うが、当時、東京では大工、左官は小回りといわずに「やり切り仕事」とか「極め仕事」といっていた。

コンクリートの小回りは一人前二合五勺、普通八人一組で二坪、もちろん、そのころはコンクリートミキサの使用はなく、全部手打ち、しかも現在のように現場へホースで水を送る設備も運搬車もない。砂利、砂、水、セメント、みなその八人のうちで肩で運搬するのだ。八人の割当は、コンクリートの練り台が二人、練り台上の介錯人(入鞆、砂利のあけ方、水掛けの兼業)が一人、

資笠姿の屈強の土方達



足蹴といって練ったコンクリートをならしたり、これを突いて落ちつかせたりする者が一人、砂利、砂運搬が入

取とも三人で、ときどき各自交替、水、セメント運搬が一人の計八人である。その砂利運搬はたいがいセメント樽を七分目に切った七分樽に山盛り、しかもこれを二つ重ねて担う強肩が普通である。今日の土工の倍以上の強肩の土方は珍しくない。そのかわり飯も今日のごとき小さな弁当箱で食うのではない。茶碗の山盛りで何杯か食べる。しかも一日に四度。飯が仕事をしているようなものである。だから、昔は大食の人は土方のようだったといわれたのである。

土方の仕事が始めるのは、冬でも六時頃が普通で、薄暗いうちに仕事に着手したもので、終るのもたいがい二時か三時に小回りを終えて切り上げた。」(竹田米吉「職人」)

以上、日清戦争が終了し、日露戦争前ぐらいまでの歴史を簡単に試みてみた。このあと日本の業者は、軍と共に大挙朝鮮へ、満州へ出ていく。そして現地で、朝鮮人、中国人を安い賃金でこきつかい、あげくの果てには、日本に強制的に連れて来て、囚人やタコ人夫の後釜にするようになっていく。その辺の事はいずれまたの機会に。

尚、昔の写真等を持っている人は是非一度当調査会に見せていただきたい。

感想、批判を編集委に。

(土方 渡)

注 写真について

2ページ題字のバックの写真は昭和初期の満鉄の鉄道工夫(「週刊朝日」一九七五年四月二五号)。その他の写真は、説明文とも土木建設業史専門委員会編「日本土木建設業史年表」(土木工業協会・昭和四三年)及び「写された幕末・第二巻」(アソカ書房・昭和三二年)から転載した。

